

随所に見られる「イメージのねつ造」
— 「自分を神の愛のうちに保ちなさい」1章を読んで —

ものみの塔発行の「自分を神の愛のうちに保ちなさい」という本を読みました。
聖書の内容に照らして、気付いた感想を書き留めたいと思います。

*** 愛 1 章 6、7 ページ 3 節『これがすなわち神への愛です』***

「こう自問することは重要です。『わたしは神への愛をどのように実証できるだろうか』。答えは、
靈感による使徒ヨハネの言葉にあります。『**そのおきてを守り行なう**こと、これがすなわち神への
愛です。それでも、そのおきては重荷ではありません』。(ヨハネ第一 5:3) わたしたちはこの
言葉の意味をじっくり考えたいと思います。」

ということで、この聖句をじっくり考えてみる事にしました。

まず、「そのおきて」とはどのおきてのことなのか。

「守り行なう」とはどういうことなのか

ということから取りかかりましょう。

この少し後に「神のおきてとは何か」という投げかけがありましたので、それをたたき台にして
考えることにしましょう。

*** 愛 1 章 8 ページ 7 節『これがすなわち神への愛です』***

「ヨハネは、神への愛とはすなわち「**そのおきてを守り行なう**」ことである、と説明しています。
神のおきてとは何ですか。エホバは、み言葉 聖書を通して数々の明確な命令を与えておられます。
例えば、酩酊，淫行，偶像礼拝，盗み，うそなどを禁じておられます。(コリント第一 5:11；
6:18； 10:14。エフェソス 4:28。コロサイ 3:9) 神のおきてを守り行なうことには、聖書
に明言されている道德規準に沿って生きることが含まれます」。

ここで、「神のおきてとは何ですか？」と投げかけて、真っ先に具体例として挙げられているのが、
「酩酊，淫行，偶像礼拝，盗み，うそなど」です。

確かにこれらは、「神のおきて」に違いはありません。

しかし、ここでは、「ヨハネ第一 5:3」をじっくり考えるということなので、当のヨハネに尋
ねたら、果たして彼は真っ先にこれらの言葉を挙げるのだろうかと考えてみました。

ヨハネにとっても「神のおきて」とはそういうイメージなのでしょうか？

ヨハネがここで、「そのおきて」と呼んでいるものは、その少し前の 4：21 にはっきりと書か
れています。

「神を愛する者は自分の兄弟をも愛しているべきであるという、**このおきて**をわたしたちは彼から受けているのです。」(4:21)

ヨハネが『そのおきて』を守り行なうこと、これがすなわち神への愛です。」と述べていた、「そのおきてとは、「神を愛する者は自分の兄弟をも愛しているべきである」という掟のことです。ですから、「神のおきて」とは何でしょうか？と尋ねたら、一も二もなく、ヨハネはこのように答えたことでしょう。

「酩酊，淫行，偶像礼拝，盗み，うそ・・・」などの言葉は、恐らくその時点でヨハネの思いに上ることすらなかったのではないのでしょうか。

ヨハネは単に聖書研究者や教師ではなく、キリストの弟子でしたから、「神の掟」という言葉から思い浮かぶイメージは、「酩酊，淫行，偶像礼拝，盗み，うそ・・・」などではなく「兄弟を愛する」というイメージしか浮かばなかったであろうということは容易に理解できます。

そしてヨハネは、そのおきてを「彼から」つまりキリストご自身から受けていると書いています。では、イエス・キリストは、この同じ質問、「神のおきて」とは何ですか？」という質問にどのように答えられるだろうかと言う事も考えてみたいと思います。

もちろん自分の勝手な推論では、ろくな事にはなりませんので、やはり聖書から見いだしたいと思います。

次に引用したのは、ルカの福音書からですが、

「ある支配者が彼に質問してこう言った。「善い師よ、何をすれば、わたしは永遠の命を受け継げるでしょうか」。イエスは彼に言われた、…あなたはおきてを知っています。『姦淫を犯してはいけない，殺人をしてはいけない，盗んではいけない，偽りの証しをしてはいけない，あなたの父と母を敬いなさい』。すると彼は言った、「わたしはそれらをみな若い時からずっと守ってきました」。それを聞いてから，イエスは彼に言われた、「あなたには足りないことがまだ一つあります。あなたの持っている物をみな売って，貧しい人々に配りなさい。そうすれば，天に宝を持つようになるでしょう。それから，来て，わたしの追随者になりなさい。」(ルカ 18:18 - 22)

「姦淫、殺人、盗み、偽り」などに関する道徳的な要求も確かに「おきて」の一部には違いありません。それらを、「全部、若いときから守って」いても、「足りないことがまだ一つ」あるとイエスは言われました。

しかし、実際には、持ち物を売って施すことと、追随者になるという「二つの」ことを述べているようにも思えます。しかし、「足りないことは1つ」と言われていますので、どちらか1つは付随的なものと言えます。

と言う事は、明らかに「キリストの追随者になる」つまり「クリスチャンになる」ということです。

この「ある支配者」が知っていて、守ってきた「姦淫、殺人、盗み、偽り」などは律法中のおきてです。もちろんクリスチャンにも当てはまりますが、キリストの追随者になった人のおきては、別にある事をイエスは示されました。

だから、イエスは弟子たちに、わたしはあなた方に「新しいおきて」を与えます。と言われたのです。

そのクリスチャンのための神の掟こそ、「互いに愛し合う」というものであり、まさしく、それがあれば、姦淫、殺人、盗み、偽り、などに関する道徳的な要求という細かな「おきて」は不要になります。なぜなら、全ては「新しいおきて」に包含されてしまうからです。

クリスチャンになり損ねた人が抱く「神のおきて」に対するイメージと、キリストが得て欲しいと願われた「神のおきて」の違いがどこにあるかを物語る1つの出来事です。

さて、ヨハネ第一の書からもう少し、「神のおきて」について理解を深めたいと思います。

「…子供らよ、言葉や舌によらず、行ないと真実とをもって愛そうではありませんか。」

「**これによって**わたしたちは、自分が真理から出ていることを知り、また、何か心に責められるようなことがあっても、それについて[神]のみ前で自分の心を安んじることができるでしょう。神はわたしたちの心より大きく、すべてのことを知っておられるからです。

愛する者たちよ、心に責められることがなければ、わたしたちは神に対してはばかりのない言い方ができるのです。そして、わたしたちが何を求めようと、[神]から頂くことができます。それは、わたしたちが**そのおきて**を守り行ない、[神]の目に喜ばれることを行なっているからです。実際、これが**神のおきて**です。すなわち、わたしたちがそのみ子イエス・キリストの名に信仰を持ち、彼がわたしたちに**おきて**を与えたとおりに、互いに愛し合うことです。

さらに、**彼のおきて**を守り行なう者はずっと彼と結ばれており、彼もその者とずっと結ばれています。そして、彼がわたしたちに与えた霊により、**それによって**わたしたちは、彼がわたしたちとずっと結びついていることを知るのです。

愛する者たちよ、靈感の表現すべてを信じてはなりません。むしろ、その靈感の表現を試して、それが神から出ているかどうかを見きわめなさい。多くの偽預言者が世に出たからです。」(ヨハネ第一 3:18 - 4:1)

4:1で突然、まったく別の話になっているように思えます。

愛についてずっと書いてきて、唐突に、偽預言者の話になります。

現代の聖書が章と節で区分されているのは、参照しやすくするために後代に挿入されたもので、実際は、手紙であり、内容は連綿と続いている文章です。

よく調べると、この4：1以降も、全く別の話ではなく、依然として、その前の内容と関連していることが分かります。

それは、同様の事を述べている、ヨハネの、2番目の手紙からも分かります。

「…それで今、婦人よ、新しいおきてではなく、わたしたちが初めから持っていた[**おきて**]を書き送る者として、あなたにお願いします。それは、わたしたちが互いに愛し合うことです。そして、**彼のおきて**にしたがって歩んでゆくこと、それがすなわち愛です。あなた方が初めから聞いているとおり、そのうちを歩んでゆくこと、**それがおきて**なのです。**というのは**、欺く者が多く世に出たからです。すなわち、イエス・キリストが肉体で来られたことを告白しない者たちです。それは欺く者、反キリストです。」(ヨハネ第二5-7)

ここで「新しいおきてではなく、初めから持っていたおきてを書き送る」と述べているのは、この手紙が書かれたのが一世紀の終わり近くで、だいぶ年数も経っていたので、これはヨハネの発案による掟ではなく、クリスチャンが初めから持っているキリストの掟であると念を押しているものと考えられます。

「…というのは」という表現は、なぜ私がこのように言うのかという理由はこのことにあります…というニュアンスの言葉です。

クリスチャンが互いに愛し合うことが「おきて」であり、そのおきてに従って歩むことが「愛」であり、そのうちを歩んでゆくことが「おきて」なのだと、述べられています。

「愛はおきて」であり、「おきてとは愛」であるということです。

しかし、それを銘記させる理由が、なぜ「欺く者」「偽預言者」と結びつくのでしょうか。

この神の、そして主キリストの「おきて」がどのようなものかを、正しくしっかりと思いに銘記させる事こそが、偽預言者の欺きから身を守る事になるからに違いありません。

言い換えればそれは、「欺く者」や「偽預言者」などが使う主要な手口が、どういう種類の「偽の神の言葉」なのかと言う事を、示すものになっていると言えるでしょう。

彼らの業にはありとあらゆる欺きや偽情報があるでしょうが、その最も主要な、際だった欺きが、他ならぬ、「神のおきて」、キリストが教えられた、キリストの弟子が第一に守るべき「おきて」とは何かについての欺きであるということを、ヨハネは明らかにしているということです。

「欺く者」「反キリスト」のボスは「最も狡猾なものと言われる」サタンですし、すぐにバレるようなものでは「欺かれる」ようなこともないので、そこは非常に巧妙な仕方で、この「おきて」を他のものにすり替えて、最終的に全く別のイメージをクリスチャンに植え付けように見事に工夫されているに違いありません。

この「神のおきて」こそ、「本物のクリスチャン」を形づくる根幹をなすものですから、この欺きの犠牲者になる人は、クリスチャンとして致命的な影響を受けることとなります。

だからこそ、ヨハネは極めて強い口調で、それを警告しているのです。

続く節でヨハネはこう述べています。

「わたしたちが働いて生み出したものを失わないよう、むしろ十分な報いを得られるよう、自分自身によく気をつけなさい。先走って、キリストの教えにとどまらない者は、だれも神を持っていません。**この教え**にとどまっている者は、父も子も持っているのです。**この教え**を携えないであなた方のところにやって来る人がいれば、決して家に迎え入れてはなりませんし、あいさつのことばをかけてもなりません。

その人にあいさつのことばをかける者は、その邪悪な業にあずかることになるからです。」(ヨハネ第二 8 - 11)

9 節や 10 節の「この教え」とはどの教えのことでしょうか。

それは「キリストの教え」の事であり、すなわち前節からずっと述べている「互いに愛し合う」というのがキリストが教えられた「クリスチャンのおきてである」という教えに他なりません。

「おきて」とは「互いに愛し合う」事に尽きるという「このキリストの教え」に留まらず、まことしやかに、すり替えられた「超・新しい掟」論をかざして説得しようとするものは家に招くどころか、挨拶さえしてはならない。挨拶するだけで、その者と同じ「邪悪な業」に与ることになる。とさえヨハネに言わしめた、この重大な犯罪とは「偽・神のおきて」に関することだということが分かります。

人が「クリスチャン」か、そうでないかを証明するもの

「この者は確かに私の是認する、私の愛するものである」という、神から発行される身分証明書となるものは何でしょうか？

「…わたしはあなた方に新しいおきてを与えます。それは、あなた方が互いに愛し合うことです。つまり、わたしがあなた方を愛したとおりに、あなた方も互いを愛することです。あなた方の間に愛があれば、それによってすべての人は、あなた方がわたしの弟子であることを知るのです。」(ヨハネ 13:34 - 35)

まったく明らかな事ですが、ともかくキリストは、真のクリスチャンの資格にかなっているのは、「家から家に野外宣教をしている」というのがその第一条件であるとか、何時間伝道しているとか、そうしたことで見分けられるとは言われませんでした。

キリストが終始教えられたのは、「互いに愛し合う」というおきてです。

最後にもう少しだけ、「神のおきて」についてヘブライ語聖書からも確認しておくことにしましょう。

「…地の人よ、何が善いことかを〔神〕はあなたにお告げになった。そして、エホバがあなたに求めておられるのは、ただ公正を行ない、親切を愛し、慎みをもってあなたの神と共に歩むことではないか。」(ミカ 6:8)

神が人に求めておられることは「ただこれに尽きる」と言われています。
これは神の言葉です。

さて、もうひとつ、取り上げたい質問が残っていました。

「そのおきてを守り行なうこと、これがすなわち神への愛です。それでも、そのおきては重荷ではありません。」と述べられているところの、「守り行なう」とはどういうことを意味するのだろうか。ということです。

「守り行なう」と訳されている原典のギリシャ語は「テーローメン」と言います。
英語ではこの語は一般に [keep, guard, observe] などの語に訳されています。
ものみの塔発行の「ギリシャ語逐語訳」や新世界訳英語版では [observe] となっています。

[observe] はオブザーバーのオブザーブですが、英和辞典では、「観察、観測」と訳されます。
そのまま直訳すると「その掟を観察すること、これがすなわち神への愛です」となります。
しかし、一般的にこのギリシャの「テーローメン」(基本形:テレオ)は「守る」「保つ」と訳されます。
様々な日本語訳の聖書を見ても、どれも皆同じです。幾つかの例を挙げますと、

(その誡めを) 守る - 岩波翻訳委員会訳

(神の掟を) 守る - 新共同訳

(神の命令を) 守る - 新改訳

(その戒めを) 守る - 口語訳

唯一の例外が、新世界訳です。新世界訳では、この語が使われているほとんどの箇所、それを「守り行なう」と訳しています。

しかしこの語に「行なう」というような行動を意味するニュアンスは含まれていません。

新世界訳の幾つかの例：

「…わたしがあなた方に命令した事柄すべてを守り行なうように教えなさい。…」(マタイ 28:20)

「…もしわたしを愛するなら、あなた方はわたしのおきてを守り行なうでしょう。」(ヨハネ 14:15)

「…わたしのおきてを持ってそれを守り行なう人、その人はわたしを愛する人です。さらに、わたしを愛する人はわたしの父に愛されます。そしてわたしはその人を愛して、自分をはっきり示

します。」(ヨハネ 14:21)

「…だれでもわたしを愛するなら、その人はわたしの言葉を守り行ない…」(ヨハネ 14:23)

「…わたしのおきてを守り行なうなら、あなた方はわたしの愛のうちにとどまることになります。わたしが父のおきてを守り行なってその愛のうちにとどまっているのと同じです。」(ヨハネ 15:10)

「…彼らがわたしの言葉を守り行なったのであれば、あなた方の言葉をも守り行なうでしょう。」(ヨハネ 15:20)

「…彼らはあなたのみ言葉を守り行ないました。」(ヨハネ 17:6)

「守る」という意味の一語を「守る」と「行う」という二つの動詞を結合させて訳しているわけですが、実際、「守り行う」べき事を告げようとするとき、「守りなさい」では、目的は果たせません。しかし、「行いなさい」と言えば目的は果たせます。「守り行う」という日本語のニュアンス、受け止め方は、「守る」事よりも「行う」の方に注意が向き、実質的には行動を促す言葉と言えます。

行動を伴うべき事を述べるときには時には、ちゃんと「行い」という単語と両方が使われます。

「…それゆえ、彼らがあなた方に告げることはみな行ない(ギリ語:ポイエオー)、また守り(ギリ語:テレオ)なさい。…」(マタイ 23:3)

ここでは「テレオ」を他の場合と同様に「守り行いなさい」と訳してしまうと、「みな行い、また守り行いなさい」になってしまうので、こういう場合に限り、本来の意味通り、「守り」と訳しています。

聖書中のこうした用例から、「テレオ」には「守り行う」という意味はないという事がはっきり分かります。

マタイ 27:36, 54; ヨハネ 17:11, 12, 15 などでは、この語は「見守る」と訳されています。ですから、明らかに、「守り行いなさい」という訳は誤訳であり、「守る」だけでなく「行動で表すべき」という概念を意図的に持たせようとしているということがうかがえます。

中には、「行なわないなら、守っている事にならない。行なっていれば、それが守られている事になるんだから、それでいいんじゃない？」と言われる方もおられるかもしれません。

しかし「守る」という概念、認識はそれほど単純なものではありません。

このことは後で詳述しますが、改めて「神の愛」の本に戻りますが、冒頭から終始、執拗に「行動」が強調されています。

*** 愛 1 章 6 ページ 3 節『これがすなわち神への愛です』***

『『永遠の命を目ざしつつ自分を神の愛のうちを保ちなさい』。(ユダ 21)「自分を……保ち」という表現は、神の愛のうちにとどまるにはわたしたちの側に行動が求められる、ということを示

唆しています。]

『自分を保ち…』という表現は、行動が求められる事を示唆している。」と言う見識はまったく理解に苦しみます。

「保つ、保持、維持」という概念は、無変化継続というイメージで、どちらかと言えば静的なイメージで、「自分を変革」や「自分を役立たせる」などの表現なら動的なイメージがありますが、「保持」に行動が示唆されていると考える人は恐らくいないでしょう。

*** 愛 1 章 7 ページ 6 節『これがすなわち神への愛です』***

「神への本物の愛には、「エホバを愛している」と言う以上のことが含まれます。信仰と同じく、真の愛は、それが促す行動によってはっきりと見分けられます。(ヤコブ 2:26)」

愛についての論議の中で、なぜ、信仰と業の関連の聖句が参照されるのか、よく分かりませんが、「…実際に、霊のない体が死んだものであるように、業のない信仰も死んだものなのです。」(ヤコブ 2:26)

と言う論議から「業のない愛も死んだものである」と言わんとしているのだと思いますが、「愛」とは、本当にそういうものなのでしょうか。

本当に「真の愛は信仰と同じ」のでしょうか。

「信仰」と置き換えても、全く同様に成り立つ概念なのでしょうか。

「行なっていれば、それで、本当に「守っている」と言えるのでしょうか。

次にこれを検証してみたいと思います。

まず、「業」があればそれは信仰がある事を証明し得るのでしょうか。

「業」があればそれは「愛」を抱いている証明になるのでしょうか。

例えば、パウロの次の言葉は何を示していますか。

「…たとえ預言の賜物を持ち、すべての神聖な奥義とすべての知識に通じていても、また、たとえ山を移すほどの全き信仰を持っていても、愛がなければ、何の価値もありません。

そして、ほかの人たちに食物を与えるために自分のすべての持ち物を施しても、また、自分の体を渡して自分を誇れるようにしたとしても、愛がなければ、わたしには何の益にもなりません。」

(コリント第一 13:2 - 3)

山を移すほどの「業」を伴った信仰でも、「愛」がなければ無価値。

食物や、自分の体さえ与えるほどの「業」を実際に行動で示しても「愛」がないなら無価値。

この信仰が本物だったとしても、そして、実際にそれを示す驚嘆すべき業を伴っていたとしても、それ自体は「愛」がなくても行い得ると言うことが、まず分かります。

そして、自己犠牲的な素晴らしい愛の行動と思えるものも「愛」なくして行えるということです。「信仰」と「愛」を置き換えて、同じ法則が当てはまると考える根拠もないことが分かります。

「業」の動機付けが「信仰」であり、「信仰」の動機付けが「愛」である言うのが聖書的な見方ではないでしょうか。

本当に「愛は行動によって見分けられる」というようなものなののでしょうか。

確かにパウロは、行動の大切さを強調しています。

「…兄弟に向かって優しい同情の扉を閉じるなら、その人にはどのようにして神の愛がとどまっているのでしょうか。子供らよ、言葉や舌によらず、行ないと真実とをもって愛そうではありませんか。」(ヨハネ第一 3:17 - 18)

確かに、ただ口で言うだけで自分で行える具体的な提供をあえて差し控えるなら、クリスチャンのおきてに反することになります。

1つ見落としてならないのは「行い」だけでなくさらに重要なものがあります。

それは「真実」をもって愛するということです。

しかし、実際のところ、窮乏している人にとって、とにかく救援物資だけでも助けになります。そしてその人にとって、自分に何もしてくれない人の「愛」は、何かしてくれるまでは見えません。状況にもよりますが、およそどんな時にも、暖かな、慰めや励ましの「言葉や舌」はありがたいものです。

みんなが援助してるんだから、ウチもなんかしら、しとかなないと、後で何と言われるか分かったもんじゃないと考える人は、「それなり」の援助を差しのべることでしょう。

「真実」をもって愛するためには、今本当に必要なものは何かを見極めたり、場合によっては、窮乏している人に、厳しい助言を与えるのが最も最善と言う事もありうるのです。

恐らく、「みんなは、私に色々と生活物資をくれるのに、この人は私に文句しか言わない。」と感じるなら、その時、その人は決してその文句しか言わない人の、「深い思い」や「真実による愛」を見分けたりできないでしょう。

こうした状況の中で、どのような人に「神の愛が留まる」のでしょうか。

これが人と神の視点の相違です。

では改めて、執拗に「行い」を強調している先の引用した例をもう一度取り上げてみましょう。

「神の愛のうちにとどまるにはわたしたちの側に行動が求められる、ということを示唆していま

す。』

「神への本物の愛には、「エホバを愛している」と言う以上のことが含まれます。信仰と同じく、真の愛は、それが促す行動によってはっきりと見分けられます。」

この文章が述べているのは、なにがしかの行動が見られないとその人が自分を神の愛のうちに保とうとしているかどうか神には見極めが付かない。

神は、「あなたを愛します」と祈りの中で口で言われても、何らかの行動がないと、それが「神への本物の愛」なのかどうか神には分からない。と断言していることになります。

「神への愛」が何らかの行動で示されなければ、見分けられないのは、人間であり、業を行わせたい組織からの見地です。

行動のあるなしに関わらず人の心を知り、動機をご覧になる神は、その人の神への愛が本物か、そうでないかを十分に見分ける事がおできになります。

前述に「守る」を「守り行う」と訳しているのは、意図的な誤訳であろうと述べました。

ものみの塔は雑誌や出版物に限らず、新世界訳聖書さえ至るところで、「業」を際立たせるための、原典を踏み越えた、あるいは差し置いた、表現の改変やあからさまに手心が加えられている箇所が見いだされます。

例えば、次に示すエフェソス 6：15 ですが、ものみの塔出版物で、エホバの証人を野外宣教等に駆り立てる時にしばしば引用される、聖句の 1 つですが、その前後の流れを見てみましょう。その訳し方のどこが意図的な改変と考えられるかですが、それを確かめるために言語のギリシャ語を示します。

13 διὰ τοῦτο ἀναλάβετε τὴν πανοπλίαν τοῦ θεοῦ, ἵνα δυνηθῆτε ἀντιστῆναι ἐν τῇ ἡμέρᾳ τῇ πονηρᾷ καὶ ἅπαντα **κατεργασάμενοι στῆναι**. 14 **στῆτε οὖν περιζωσάμενοι** τὴν ὀσφὺν ὑμῶν ἐν ἀληθείᾳ καὶ ἐνδυσάμενοι τὸν θώρακα τῆς δικαιοσύνης

赤枠内の拡大

ステーナイ ステーテ
κατεργασάμενοι στῆναι. 14 στῆτε οὖν περιζωσάμενοι τὴν ὀσφὺν
達成, うまくやる 立つために 立って 故に 締める 腰に

この赤枠内に示した部分は 13 節後半から 14 節にかけての部分です。

「立つ」という意味のギリシャ語が、続いているのが確認できると思います。分かり易く、原語の流れで直訳的にこの部分を訳すとおよそこうなります。

「13 神の武具を身につけなさい、全てを達成して、立つために。

14 立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、

15 平和の福音の備えを足にはき、…」(エフェソス 6：13-15)

このように、先ず、13と14の「立つ」の意味が異なっています。13は全てを成し遂げて「立つ」（クリスチャンの戦いに勝利する）ことができるようにするためにと言う意味であり、ここで文節はいったん区切られます。そして14節以降具体的にその武具についての個々の説明が1つずつ順に続いてゆきます。その武具を身につけ始める準備として、先ず「立って（文字通り起立して）、最初に真理の帯を腰に、そして、胸、足…と続きます。

この原語からの記述や、下に示す他の日本語訳と、新世界訳の表現を比べてみて下さい。

13…あらゆる〔なすべき〕ことをなした上で堅く立つことができるよう、神の武具をつかみ取りなさい。

14 だから堅く立ちなさい、あなたがたの腰を真理〔という皮帯〕で締め、義の胸当てをまとい、
15 平和の福音への準備という履き物を両足に履き、」（岩波翻訳委員会訳）

13…すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。

14 立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、

15 平和の福音を告げる準備を履物としなさい。」（新共同訳）

13 完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。

14 すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、

15 平和の福音の備えを足にはき、」（口語訳）（他の翻訳聖書も同様です。）

「13…すべての事を徹底的に行なった後、しっかりと立てるようにするためです。14 それゆえ、真理を帯として腰に巻き、義の胸当てを着け、15 平和の良いたよりの装備を足にはき、こうしてしっかりと立ちなさい。」（エフェソス 6:13 - 15 新世界訳）

14節の頭にあるべき「立って」を15節の後ろに移した上、表現も「こうしてしっかりと立ちなさい」としています。

これはこの記述の一連の文脈の流れの意味を変えるだけでなく、「福音、足」の部分だけを殊更に目ださせています。

真理の帯や、正義の胸当てよりも、ものみの塔は「人の〔足〕に異常な関心があるようです」

こんなござかしい事までする必要がなぜあるのでしょうか。

こうした涙ぐましいまでの小細工の背後には、とにかく、むやみに、行動、伝道に駆り立てねばと言う脅迫観念が働いているとしか言いようがありません。

これも、彼らの「超・新しいおきて」論の成すところなのでしょう。

最後に、誤解がないように付け加えておきますが、クリスチャンとしての「行動」は必要ないなどと言っているわけではありません。又言うつもりもありません。この記事から受け止めて欲しいの思っているのは、「神のおきて」に関する、正確な理解とそのイメージです。

「神のおきてを守ることが、すなわち神への愛です」と書き送ったヨハネの思いにあったイメージを、取り損なっていないか、勘違いしていないかを自問してみても良いのではないかというこ

とです。「まだ何か足りないんじゃないだろうか、やり忘れてある事があるんじゃないかしら、さらに多くの事をできるはずだと思われるに違いない。」など、こんな感覚が僅かでもあるなら、ヨハネが伝えようとしたメッセージを明らかにうけとめ損なっていると言えます。「互いに愛し合うべき」という神のおきては、決してこんな「強迫観念じみた」感覚の伴うようなものではありません。

別に私が言うまでもなく、素直に聖書を読めば誰にでも分かることです。

前述で、業と愛についての関係をコリント 13 章の冒頭の部分から考えましたが、さらにパウロの手紙は「愛」の定義へと論議が進みます。

長くなるので引用はしませんが、「愛とは何か」についての具体的で細かな事まで取り上げて説明していますが、その中に「業」についての言及は一切ありません。

全ては「心」の働きです。完全に精神的（スピリチャル）なものです。

同じくパウロは、神に愛されるためにはどうあれば良いかについてはこう記しています。

「…したがって、神の選ばれた者、また聖にして愛される者として、優しい同情心、親切、へりくだった思い、温和、そして辛抱強さを身に着けなさい。」（コロサイ 3:12）

なにがしかの行動に表さなければ、見分けられないと言うようなことは何も記されていません。それも当然で、神は心をご覧になる方だからです。

それで、神の掟を「守る」というのは、その通りに「行っている」と言う事ではなく、神の掟を注意深く観察すること、心に保つことです。神のおきてを「私が保護する」ということなのです。神の掟をじっくりと心の目で見つめ、見守り、熟考し、深く味わい、それを保ち続ける事です。神の掟を守るというのは、そう言う霊的（スピリチャル）な深淵な心の働きである事を聖書は私たちに伝えているのです。「守る」とはこういうことだという極めつけがこれです。

「…我が子よ、わたしの言葉に**注意を払え**。わたしのことばに**耳を傾けよ**。それがあなたの目から離れ去ることのないように。それをあなたの**心の中に保て**。それは、これを見いだす者たちにとっての命であり、その全身に健康を保たせるものだからである。守るべき他のすべてのものに勝ってあなたの心を守れ。命はそこに源を発しているからである。」（箴言 4:20 - 23）

神のおきてで心が満たされると、その自分の心の赴くままに人は行動することになる。つまり、その人は、仲間や隣人に対して、おきてに沿った言葉や振る舞いを示すことになる故に、また自分の救いの希望や神の特質や将来の約束などについて、気が付いたら、隣の奥さんに話していたと言うような事になる故に、ヨハネが書いているとおり、クリスチャンが互いに愛し合うことが「おきて」であり、そのおきてに従って歩むことが「愛」であり、そのうちを歩んでゆくことが「おきて」なのだということになるのです。